

## 東アフリカ高地におけるアグロフォレストリーの発達と在来知の関係

### Development of Agroforestry and Local Knowledge in East African Highland

佐藤 靖明 (SATO Yasuaki)

高い人口密度を擁する東アフリカ高地には、バナナを基幹作物とする集約的農業地域が広がっている。本研究は、その地域でのバナナを含むアグロフォレストリー(樹木とほかの作物が混植される集約的な土地利用形態)の発達と住民の知識がいかなる関係にあるのかを、住民へのインタビュー、苗木の配布、追跡調査をとおして明らかにし、在来知がコミュニティの外からの知識やモノを取り込む動的な様態を浮き彫りにすることを試みる。

平成 25 年度は、農村に直接介入しながら調べる方法を軌道にのせることができた。具体的には、調査配布用の苗木の育成、ウガンダ中部農村の住民への苗木配布作業、住民へのインタビュー、西部での農村調査のための準備をおこなった。

まず、ウガンダの研究者で森林生態を専門とするマケレレ大学ジョン R.S. タブティ教授のサポートの下、配布用に選定した樹種の苗木の育成管理をおこなった。その具合を確認し、配布するのは9つの樹種に絞ることとした。

中部の調査村では、まず調査に協力的な約 20 世帯と配布する方法や体制、各世帯に植える樹種および苗木の数(1~4本)を決定した。その後、苗木を首都カンパラから調査村へ運搬し、各世帯へ配布した。そして、各樹種を選んだ理由、選ばなかった理由について聞き取りをするのと同時に、配布に触発されて変化する住民のニーズも把握した。さらに、次年度における追加の苗木配布、およびモニタリングの方法を検討した。

この調査の結果、前回までの調査で明らかになっていたものとは別の樹種への嗜好性(例えば果樹等)、新しい樹種への関心の高さが浮き彫りになった。また、基幹作物であるバナナの畑への樹木の栽植には概して慎重である一方で、住居の近くには多様な樹木を植えることを好む傾向があることも明らかになった。

苗木を各世帯に配布した後、残った苗木の管理を住民の一人に依頼し、それらを自由に誰でもアクセスできるようにし、受け取った世帯を記入してもらうことにした。そして後日、普及具合を調べることにした。また、次年度に追跡調査を各世帯の畑でおこなうことも、研究協力者、住民と確認した。

なお、ウガンダ中部とは異なる自然環境、文化社会的背景を持つウガンダ西部の農村についても今後調べるため、彼らの生活および農業に関する資料を集めた。また、調査候補村のインフォーマントと連絡をとり打ち合わせをおこなった。

次年度は、ウガンダ中部で苗木の追加配布を通じた調査をおこなうとともに、西南部でも人びとのニーズを把握し、地域間での「在来知」の比較をしていく予定である。